

シベリア抑留前後の記

岩手県 荒田昌三

昭和十九年七月、関東軍の重鎮として知られる満州駐屯の北部二十部隊（八師団弘前野砲八聯隊）に動員が下り、ルソン島決戦の切り札として出動してからの関東軍は崩壊が始まっていた。

残留となった隊員は戦線を縮小し、混成して東満の国境守備隊に配備され、国境から新京へ通じる最短ルートである牡丹江（よんか）敦化の中間点に当たる鏡泊湖畔を我らの墓場と定め、山の中腹を三交代で穿ち、掩砲所の構築に専念することとなった。

翌二十年の八月九日、起床と共に非常呼集の呼称があり外へ出ると、直ぐ頭上を敵の偵察機が通過して行った。

沈黙を守っていた関東軍の砲門が開かれ、各兵に手榴弾が渡され、木銃の先端を削り肉迫攻撃に備えるよ

う指示が出され、本隊は牡丹江付近の友軍を援護するため急遽出発した。人馬は焼けつくような炎天下を砂塵を蹴って進む。湿地に掛かると馬が沈み砲車が止まり、肩で担ぎ砲の曳行に汗を流す。

十六日、突如退却の命令が出され、豪雨の中、今来た道を引き返し、翌日陣地に着く。

十九日、朝の点呼に際し、中隊長から「堪え難きを堪え忍び難きを忍び戦の和を講ぜんとす」の詔書の奉読があった。一抹の不安がないでもなかったが、正に青天の霹靂（へきれき）で、しばし皆茫然とし声なく、不安と焦燥の念にかられた。

ソ連戦車の動向を警戒しながら、山裾から一里ほど山奥に入り、火砲を分解し弾薬と共に地中に埋め、馬の鳴き声を遠ざけるため更に山奥に移る。ソ連兵を発見するたびに、三日に上げず幕舎の位置の移動を余儀なくされる。

食糧を持続させるため二食給与とし、来る日も来る日も食糧運搬であるが、限りあることであり、だれにも降伏時の決心が求められていた。しかし、入隊時、

お互いは骨を拾い合う中で、常に団結とか軍紀の教育を受けてきたのであるが、前途の目標を失った今、烏合の衆に変遷しつつあった。秋の早い満州の野辺のところどころ、開拓者の庭跡であろうか、身の丈となった紫苑の花が一縷の望みのように思えた。

三十日、全面降伏のため、早朝幕舎を払い朝霧をついて三大隊本部前に集結したが、往年の勇将は寂として声なく、兵は士気を失い、今までの優越感はどこへやら、皆不安と焦燥の念にかられていた。

鏡泊湖の水は碧く澄み、南湖頭付近の道路はソ連戦車の往来で三倍ほどに拡幅され、身近にソ連人を見る珍しさは恐怖と交錯する。

日本兵は一列に並べられ、順番に銃剣を取り上げられ、広場はうず高い武器の山と化していた。常日ごろ武士の魂とし、護り神として後生大事にしていたものを、急にどこかへ持ち去り、清められた日本人の心を根刮きもぎ取った感じで、一時体内の血が逆流したかと思うと同時に、憤りと悲しみを感ぜ嘔吐したい状態の気持ちとなった。

炎天下の行軍が始まった。小川があれば立ち寄り、馬に水をやる間の寸時の憩い、夕闇迫るころ、馬を樹林の中に繋ぎ、永遠の別れを惜しむ。野営は天幕のない野宿となり、焚き火の燃え尽きるころいつしか眠りに入る。

九月一日、行軍は三日目となる。朝霧の間から開拓部落が見えるはずなのに、焼跡と化し何も無い。幾年か前この辺りは人跡未踏の原野で、満州開拓団の入植により、幾多の尊い心血と爆薬が費され建設された集落は破壊によって消え失せ、再び原野に戻っている。道々に半焼の日本兵が斃れている。炎暑のため臭いを発散しているのですぐそれと分かる。行路中の戦死者はだれにも知られず、だれにも葬られることのない霊となるが、野辺の花だけでも美しく飾ってくれることを願って合掌するのみであった。

今日も悠に十里は歩いて、疲れ切ってやっと眠りについた夜半、照明弾が打ち上げられ、その不気味さに不寝番をおのかせた。

翌々三日は、ソ連の騎馬隊が近づき、時計や万年筆

をはじめ、めぼしい被服まで略奪された日である。やがて東京城の街に着いたが、街並みのどの家も赤旗を掲げ無言であった。

朝鮮へ通ずる鉄道の橋は爆破により落橋しており、鉄路は赤く錆びていて、やむなく進路は北へ取られて進む。携行の水筒の水もかれ、馬蹄の足跡に溜った水を身を伏して啜る。その後幾度もソ連兵が来襲し、略奪を繰り返すのだが、その都度隊列が崩れ、鰯の群れが鮪に追われたときのように、恐怖心から競って道路の片隅に寄り、難を逃れようとするが、屈辱の心でいっぱいであった。

五日の午後、蘭崗の飛行場に着き、格納庫に誘導され公式の検査があり、貴重品と紙類の全部が没収された。検閲の終了した者から無差別に並べられ、何故か千人単位に区切られ整列させられたが、従来の編成は乱れ、このとき事実上の捕虜登録がなされた。改めて支給されたのは岩塩少々であった。

八日、朝は雨であったが、部隊長や在滿希望の戦友と別れ、新梯団編成の者と共に、再び行軍が始まる。

外被から雨が漏る中、今日も十里は歩いたのだが、休憩もなしに夜も続けられ、ついに徹夜の行軍となった。川に差し掛かるが橋がなく、浅瀬を探して川縁を行く。足を取られないように、前を行く者に縋りながら川を渡る。

夜が白むころ、牡丹江市郊外の実狼に着く。間もなく帰国できるという噂を信じ、携帯してきた残り少ない最後の米を出し合い、飯盒炊さんをし元気を回復する。遥かに見える牡丹江の街は、発電所の姿はなく、市街の家屋は灰燼に帰し、興隆の兵舎の屋根も落ちていた。星の见えない夜、掖河の満人兵舎に移り、雨を凌ぐことになったが、水が一滴もなく、不自由さは言語を絶するものであった。

十二日、東條英機氏の自殺を風聞するや、既に統率を失っている隊内は、更に焦燥のみが駆け巡っていた。

十五日の夕方、いよいよ帰国するという話で、掖河駅に集合し貨車に乗車、東方に当たる日本海方面に向けて発車する。貨車の扉を少し開けて見える綏西は渡満して初年兵教育を受けた地で、兵舎の屋根は焼け落

ちてなく、綏陽の街も昔日の面影なく寂しく秋の日を受けていた。

国境の綏芬河は夜中で、入ソの時刻は知らぬ間でウオロシロフに着く。ここから南に下ればウラジオストック方面に出るのだが、列車は非情にも北へ進路を取る。もはや帰国は断念せざるを得ない。イマン、ビギンを通過し、北極星が頭の真上に輝いて見える。

ハバロフスク市の近郊、ホール地区の小駅ビヤズムスカヤで下車し野宿となる。翌日、山林地帯へ通ずる軽便山林鉄道のトロに乗る。途中、セレブリヤナの交差点で五百人ずつに分かれ、一班は山の駅フロントポイに到着した。降り立った眼前には、二重に有刺鉄線を張り巡らせた柵の中に、古びて粗末な校倉造りの木造が二棟建っていた。以前、ドイツ人の捕虜が使用したと言うが、ひどく荒んだ建物で、これが我々の収容所となり、いつか帰国するまでの住み家であった。運命の途とはいえ、何も考えることができず、冷雨も加わりなかなか眠れなかった。

収容所前に立ちはだかるザガラス山は谷合いが奥深

く、懷を一里ほど入った辺りから人跡未踏の松柏の密林地帯となる。樹木は寒帯地方なので実の成る木は一本もなく、樅と柏の喬木が林立している。

毎朝の点呼に際し、一本のタポール（斧）と一枚のピラー（鋸）が渡され、銃を持つソ連兵の監視の中、ダワイの掛け声に追われ山に入り、労働作業を開始する。次々に径二尺ほどの大木を傾斜地で伐採するが、樹の倒れるときに逃げ遅れると、樹木の枝葉の下敷きとなり死亡することになるので、大声で皆に合図が要る。

収容所の壁に“働かざる者は食うべからず”の標語が掲げられているが、食うために働かなければ帰国への方途がない、という認識に立って頑張ることにした。しかし現実には、戦利品の輸送がままにならないという理由で、初めは高粱、粟、ポーミ（トウモロコシ）粉の各一品のみの支給が続き、過去に飽食を経験した日本人にとっては過酷な仕打ちであり、いかに心を卑しいものにしたか分からない。加えて夕食の配分では、電灯のない舎屋内に松根を灯すので、入ソ以来入浴は

おろか洗面さえもできなかった顔や鼻穴は真っ黒で、掌は猿の手のように黒光りしていた。

十月五日に初雪が舞い、診察の結果、病人に指定され、一カ月の軽作業要員となり、防寒に備え壁の隙間に乾燥苔の詰め方や、泥塗り、石灰塗り、便所の清掃などが課された。

十一月、食糧は大豆のみとなり、毎食、中盒に一杯ずつが約二カ月続き支給された。戦場で勇士であった兵は見る見る痩身となり、果ては野草と塩の食い過ぎをし、栄養失調症を患い、毎朝多数の兵が斃れていき、この者たちのことを犠牲者と呼んだ。

外気が零下二〇度を超えると川面が凍り始めるが、それを待っていたのか、十二月二十日の夜半、四国出身の二名の兵長が、収容所の鉄条網を潜り満州国の方向を目指して脱走したが、翌日捕まり、射殺姿となつて戻つて来た。見せしめのためか、すぐには埋葬許可が下りず、日本兵の目の届く所に野晒しにされ、監視の警備が強化された。

一週間後埋葬することになったが、作業から帰って

来た兵に余力がなく、かつて同中隊の者を募ったが、十名しかいなかった。埋葬地の裏山は凍上に変化しており、墓穴の掘鑿は容易ならず困難を極めた。寂しい越冬であつた。

年が明けて、やっとパンを焼く釜ができたので黒パンが支給されることになったが、ノルマの基準が厳しく、一日の定量三百五十グラムを得るのには百パーセントの仕事量が要求され、常に七〇パーセントの能力では高嶺の花で、二百五十グラムだけのパンであつた。従つて絶対のカロリー不足で次の作業に支障を来たし、果ては悪循環し斃れることとなる。それでも空腹を抱え今日も山作業に行く。

星の消えない早朝から星の出る夕べまで、ダワイにせき立てられる労働は過酷な上、収容所に帰ってから飯上げや不寝番（暖炉の火焚き）の内務があり、この任には特に初年兵が当たる結果となり、星数の少ない者から次々に斃れていった。

一月から三月は、主として伐採済みの坑木を肩で担ぎ山出しをして、更に無蓋の貨車に整頓して積み上げ

る作業であつた。

五月ともなればシベリアの山にも春が来て、冬期に伐採済みとなつて裸山となつた山裾を回り、山向こうまでの山林鉄軌道工事が始まる。まず道床拵えの碎石を作るため、鶴はしとスコップ一丁が渡され、二人一組で一日に無蓋車二両に積むのがノルマである。簡単なようであるが、連結されている貨車の発進するまでに積み荷を終わらなければならないので、昼の休みも休まず稼働を余儀なくされ、暑いので裸身となり岩を叩くので、その破片が肌に刺さり、着衣も破けボロボロとなり、心身共に泥まみれのバラス採取の作業であつた。

加えて、現場までの往復の道の平地部一帯は、凍土が融解しツンドラと化し、水は澄んでいるが、靴のままで水浸しにして歩行しなければならず、足はブヨブヨとなり、後始末に苦勞をした。もう虱などはどうでもよく、折角辿り着いた二段式の寝床は、夜と共に南京虫の攻撃となり眠られず、ついに屋外に出てまどろむ。

九月、秋の草刈り作業を終えて夕方の点呼の際、急

に辺りが暗くなり失明状態となつたが、ビタミン不足からの鳥目と言われ、周辺の雑草を食することで小康を得た。

この夏の重労働は更に栄養失調を促進させ、現に頭蓋に手で触れると容易に骨の継目がかかるようになり、日によっては起床時に数名の死者が出ることもあつて、これまでの死亡者の数は総員の二割の百名を超していた。このことは、この国に搾取があるからで、ソ連の社会主義国家は、平等で搾取なき平和な国と標榜しておりながら、その反面では、各層に盗みと横領が蔓延し、安逸を貪る者がいる実情であつた。

常々、ソ連はユートピアの道程に在るとうそづいていますが、そこには進化も文化もなく、娯楽さえ許されず、鉄のカーテンに閉ざされた冷たい国で、病院の患者百人に対して体温計が一本しかなかったことからもうかがわれた。

十一月になり二度目の冬を迎えたが、越冬には持久力を失っている者にとって、昨年のような氣力を發揮することは不可能で、十二月に入って厳冬となるや、

足の指に凍傷を受け歩行困難となった。日本軍医の計らいでソ連軍医を納得させ、山を下りることとなり、ホールの病院行きが決まり、二十四日吹き曝しの中、数人と一緒に無蓋車のトロツコに乗り込む。何か死出の旅路に出掛ける感じであった。ソ連の医学は予防医学で、治療医学の進んでいない病院では、寝ている患者は食糧が少量でよい。裸で部屋に寝ていさえすれば病気は治るという信条をもってする医学である。食事はパンがなく、人参のスープのみであった。

昭和二十二年を迎えたが、この新年ほど寂しく絶望的な正月はなかった。死ということも考えられないほど疲労が激しく、空虚な毎日で、生活の実態は死の生活であったように思った。二重ガラスの窓の外は今日も吹雪である。

一月二十一日、退院と同時にホールの小川大隊に転属、山の鈴木大隊とは違って大規模な木材工場で、昼夜三交代の作業である。初め軽作業であったが、すぐ長尺原木の運搬、貨車からの石炭降ろし、製材製品の集積運搬など多彩であるが、真夜中の寒さ以外は適度

の労働量で、幾分良好な体調となる。

三月十八日、隊の半数にダモイ(帰国)の命令があった。夢のようなことで嘘かと疑う心と、嬉しい喜びの気持とが交錯し体内を駆けめぐる。過ぎたあの日があった今日の日があるのだと思うと、どうしても涙が出て仕方がなかった。

床を二段に拵えた貨車に乗車し、ホール駅を出発し、南の海、日本海に向かう。車中は放心したように横臥したままで、三月三十一日にナホトカ駅に到着。いくら考えてもその時の喜びを思い出すことはできない。

シベリアで最も暖いと言われているこのナホトカ地方も、まだ小雪が散らついており、飢えの身に毛布一枚では寒気が身にしみた。眼前に見る日本海を一つ隔てた所に、懐かしの祖国、故郷があるのだと思うと、ひとりでに涙が出そうになる。汀に寄って海水を口に含んで見たが、やはり塩辛く冷たかった。

長途の貨車で毛布代りに敷いてきたわらを清掃し、ホームにうず高く積み上げ、それに火をつけて、しばし暖を取った。しかし、この行為がこの国の法に触れ

るところとなり、昼食抜きの一カ月の重労働を課せられる羽目となった。幾山河を乗り越え、夢にまで見た喜びは去り、今また仮宿舎の幕舎から一里も歩いて海岸工事の石運びをすることになったが、歩行するだけが精いっぱい、作業やノルマなどはどうでもよく無批判となり、会話することもなく、衰弱した者から次々に落伍していった。

四月二十日、涸れるだけ涸れ、細るだけ瘦せた生色のない者のうち、先発して帰国させるとして突然四十八名が呼び出され、関門である第一ラーゲルに送られ、続いて第二、第三のラーゲルの検閲を通過し、日の丸を掲げた帰還船を目の前にした。五月五日の出航予定を告げられたが、運悪く体調を崩し、急に歩行できないほどの高熱が出て、残念ながら乗船を断念した。慚愧に堪えない所であった。

古い校舎を改造したような病棟から遙かに望まれる日本海の波音の合間に、帰還船の汽笛の音を聞きながら明日を待つ。赤十字病院船「高砂丸」の出航は五月二十六日と知らされ、死に際に冷水で蘇生したような

心地であった。夕刻、同病の者と肩を組みながら船中の人となる。もうどうでもよい、天使の化身のような、なんの欲もない心境である。

だれも動かない、声もなく波もない。船窓から見るナホトカの街の灯はだんだん小さくなっていく。だれもそうだと思ったことだろう。昨日まで飢えを凌ぎ声を限りにインターナショナルの歌を歌わされたこと、太陽のある間、ただ無意味な時を過ごしたことなどを、皆、頭の中はからっぽだった。戦争も抑留も、昨日までのことは夢のようなものである。

病室に看護婦が来て、日本食と体温計を手際よく配る。その美しさにだれもが声をかける、日本はあるかと。異口同音の問いに、昔のままあると言う。舵は南に取られ波はなく、次の日も晴天で四海は隠やか。皆、言葉を忘れたのか無口であるが、そわそわして今に騒ぎ出すのでは、いや泣き出すのでないかというような顔をしている。

何年か前この目で、この姿で、この海を渡ったことを思い出しているのかしれない。何から言ってもよいの

か分からないのだ。

二十八日午後、陸が見える、皆の顔に紅がさした。おお日本だ、舞鶴だ、樹が、屋根が、白壁が見える。我も我もと甲板に上り、デッキの手摺にしがみついて、涙せぬ者はいない。美しい、それは祖国である。よかった。よく生きてきた。もう親の懷に帰って来たのだ。

岸壁に人が並んでいる。投錨と共にボートが船脇に着き、先に患者だけが運ばれ上陸した。埠頭にはMPが立ち、星条旗が掲げられていた。DDTの散布は初めてで、親しみのある日本語の会話が快く耳に入ってきた。振り返ると、女神「高砂丸」は湾の中央に停泊し、水を吐いて航海の疲れをいやしていた。

大型バスで舞鶴国立病院に着く。体重測定では四二キロで、戦中の七五キロに比べ三三キロも減じており、あぐらでの端座は難しく転倒するばかりであった。

日の丸は地に落ちた。出征の時贈られた日の丸の旗も、あのホールのベチカの火に入れてない。国破れて山河ありと言うが、余りにも惨めな大変転である。神あらばあれ、救われもしたろう。神国日本は崩壊した

が、自らの手によって邪を正となし、神の存在しないニホンコクとなったのである。

死ということを考えないとするならば、このシベリアの抑留は全くの空虚な期間としか言いようがない。この体験を、ルソンのレイテで玉砕した我が戦友と、シベリアの凍土に眠る沢山の犠牲者の鎮魂の詞として捧げたい。

【執筆者の紹介】

現住所 岩手県盛岡市清水町七番十七号

出身地 岩手県遠野市遠野町

生年月日 大正十年三月二十四日

学歴 昭和十七年九月 日本大学高等工学校卒業

前職歴 内務省計画局

入隊 昭和十八年九月二十日 野砲兵八聯隊（弘前）

転属 昭和十八年十月五日 山砲兵第四十七聯隊

（綏西）

同 昭和二十年三月三十日 野砲兵第四十七聯隊

（第二二〇六六部隊）

武装解除 昭和二十年八月三十日牡丹江省鏡泊湖南湖

頭

入ソ 昭和二十年九月二十日（蘭崗第二百八十作業

大隊）

抑留地 ハバロフスク第十六收容所（ホール地区ビヤ

ズムスカヤ）

復員 昭和二十二年五月二十九日（帰郷同年六月十

一日）

船舶 高砂丸

上陸地 舞鶴港

帰国後職歴

昭和二十三年一月 岩手県技術吏員技師

昭和四十五年四月 岩手県土木部都市計画課長

昭和五十二年四月 岩手県盛岡土木事務所長

昭和五十四年三月 東日本建設業保証会社参事役

昭和五十八年二月 佐藤技術（株）取締役顧問

平成八年七月 佐藤技術（株）常任顧問（現在）

叙 勲 平成三年四月 勲五等双光旭日章

（岩手県 田辺 壮久）

戦争と捕虜

岩手県 新沼 隆男

昭和十九年春、徴兵検査を一年早く志願して青森県の第十六部隊に入隊。一週間後、博多経由で渡満の命令下る。日本海沿岸を汽車で南下、窓は全部遮蔽板が張られ一切娑婆とは絶縁……幾日経ったか全然分からず、博多には朝霧が立ち込める早朝に到着した。岸壁には三隻の貨物輸送船が船団を組み、その中の第二隻目に乗船出航。

玄海灘は三年来の凧とのものであったが、小山のような大波が襲来。船体がギシギシと軋む。玄海灘はアメリカの潜水艦が頻繁に出没している。果たして前の一隻と後の一隻がやられ、朝鮮の釜山に着いたのは私たちの第二隻目の輸送船だけだった。

正に命運がよかったと思わず身震いをする。列車で満州国遼陽に下車。満州第一〇八師団第五七一部隊戦